
Doll*Fight

星紡 導

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Doll*Fight

【Nコード】

N0597R

【作者名】

星紡 導

【あらすじ】

【普通】の日常の中一人の女の子の【人形】として暮らしてきたウサギの縫いぐるみ「ヴァーナ」
しかし、幸せな時間が過ぎ古いごみ捨て場に流れ着いてしまう
そこで偶然出会った怪しい青年にヴァーナの【普通】は歪められていく

D u m p * S i t e

バフッ

体が不意に宙に投げ出された

痛みはない

悲しむこともない

遠くで【主人だった人】の話し声が聞こえる

モウイラナイノ

アタラシイコガクルノ

…ゴメン…ネ

そんな声が出た後、【主人だった人】を乗せた車は音を立ててその場を遠ざかっていった。
周りから音という音が消え、静まり返る

暗い

此処はどうやらゴミ捨て場と言つところらしい

目の前にある看板がそう告げている

投げ出された際に舞い上がったホコリが自分の体にまとわりついてきた

自分はこれからどうなるのだろう、動くことのできない自分には何一つ自分でつかめる未来というものがない。

何もすることなくここに【在る】だけ

だって僕は

「嗚呼、こんにちワ」

遙か頭上で若い声がした

誰かわからない、首が動かないから

「オツと、すまないすまない、失礼しテ」

思いがわかったかのようにその声の主は僕をつまみ上げた
茶色の髪に左側だけの仮面、薔薇の巻き付いたシルクハットを被った青年の顔が間近に見える

「シー、君は呼ばれていない個体だネ」

よくわからないことを言った後、僕を観察し出した。

「アはっ、怯えないでいいヨ」

癖のある言葉でケラケラと青年は笑った。
どうやら本当に僕の思いがわかるらしい。

「ワタシは直し屋、ローチェとでも呼んでくれ」

ローチェ…女のような名前だ

「…ヨク言われる。君は何ていうんだイ？」

名前…商品名は

「違う違う、君の【主人だった人】が付けてくれた名前があるだロ
？」

そういえば、あの人が付けてくれたものがある

家に来たときキラキラしたりボンが巻き付いた僕を抱えてあの人が
始めに言ったこと

よろしく…

あの日の事が鮮明に思い浮かぶ

「なるほど、…ヴァーナ【春】…君も女の子みたいな名前じゃない
カ」

やはり、笑われた。

商品としては男なハズだけどあの人はまだ幼くわからなかったのだらう

「いやいや実にいい名前だ、気に入った！」

ローチェは僕を掲げ一段と大きな声でそう言った

ビルの間から射し込んだ太陽の光が体を明るく照す

綺麗だ、改めてそう思った

「ワタシと一緒に来るといい、此処で出会ったのも何かの縁に違いない！君が此処で朽ちていく道を選ぶなら無理には言わないが」

行きたい、ふとそんな思いが込み上げた。

あの人はもう此処に来ることはないだらう、自分に【選択する】ということが出来るのは造られてから初めてだ

行きたい、生きたい

まだ、この世界に在りたい！！

「いい返事をありがとう、歓迎しよう」

ローチェは僕を肩に乗せ、シルクハットをクイツと直すと愉快的な口笛を吹きながら赤い煉瓦を歩いていった

空はいつの間にか雲でいっぱいになっていた

もう直、雨が降るだろう

Dump*Site(後書き)

人形が主人公という物語が書きたくて挑戦してみました

T o w n * r a i n

暫くして、予想通りに小雨が降ってきた。

黒く淀んだ雲が青かった空を覆い尽くし、辺りは薄暗くなった。人の多かった通りも今は雨の為か皆建物に入ってしまったてすっきり寂しくなっていた。外を歩いている人は誰も傘に隠れて顔が見えない。

ローチェは傘を持っていなかったようで、気がつくと僕の体は雨の滴を吸い濡れて変色していた。乾けばまた元に戻るのだけれど。

しかし僕を気にすることなく鼻唄を歌いながら歩き続けるローチェもびしょびしょの濡れ鼠だった。

擦れ違う人々が振り向いてはローチェをみて苦笑する。それも当たり前か

ローチェは顔は整っている方で髪に隠れた目も大きくキリッとしている。瞳の色は暗い紫色、アメジストという石を【あの人】が見せてくれたことがある、確かそんな色だ。

それにしても、顔にはひとつも寒そうな様子は出ないニコニコと人の良さそうな笑みを浮かべている

…寒くは無いのだろうか

少し問いかけてみたがなにも返答がなく、ただただ歩き続ける。その顔はとても楽しげで今まで見てきたどの人間よりも変わっていた。なにもすることがなく、出来ることもないので僕は首の向いた方角に見える流れ行く建物を眺めていることにした。

傘を持った女の子とすれ違う、コートを着て着ぶくれた男が頭を下げる

人間の住む町が目の前を流れていく

【あの人】もう少し前までは僕をいろんな場所に連れ出し、様々なことを語りかけてくれた

大体は家の話、最近では父親の事が多かった気がする

【企業】【令嬢】よくわからない言葉ばかりだった

パシヤッ

ふと、水溜まりを踏む音が響き色とりどりの物が並ぶ小さな小さな古い店の前でローチェは立ち止まった

「随分待たせてすまなかつたネ」

頭の水滴を払い笑いかける

(…此処、がローチェの家なのか?)

「アあ、そうだヨ。改めてようこそ」

ニッコリとローチェは笑い、ビーズやメッキで飾られた扉を開いた扉の向こうには壊れた時計や破れたドレス、縫いぐるみなどが置いてあった

直し屋というのはこの事なのか…

「ナかなか綺麗だろウ?」

自慢気にローチェは部屋のなかを一回りし、僕を柔らかい布の上に置いた

体から水分がある程度抜けていく

(…凄いな、これ全部一人で直すのか?)

「ああ。凄いだろう？今はほら、そこにあるドレスを頼まれているんだ」

きらびやかなドレスが店のカウンターの辺りに掛けてある。染みがつき、裾は大きく破れてしまっている。

これが直せるのか

ふと、所狭しと置かれている物の山を眺めていると妙なことに気が付いた

ローチェは確かに【直し屋】と言っているが、時計や服、靴にテール、そして人形。これ等を全て直してしまうのだろうか？作りが違ふものをどうやって？

うんうんと考えていると、いつの間にか視界に入っていたローチェがニコリと笑い僕をふたたび抱き上げた

「君には特別にワタシの【宝物】を見せてあげよう」

ギリギリ視界に入るローチェの顔を見上げると、楽しげな口調のわりに目は笑ってはいなかった

どこか、違ふところを見ているようでそこが少し気になったが何故か何もいう気にはならなかった。何故かは僕にも分からない

そうしているうちにカウンターを通り抜けた所にあるドアを開きその中に踏み行っていく、僕はただローチェの顔を眺めていた。

Lotze's Treasure

ギイイ…

木で出来た古いドア特有の音が鳴り、部屋は開かれた。辺りは電気がついていないため暗く、何も見えないが少しだけ冷えているようで、ドアの硝子の部分が結露していた。何も点いていなかった店部分よりも冷えていると言うのはなにか目的があつて冷やしているのだろうか

(何があるんだ？暗くてよく見えない)

「今、明かりをつけろ。ただ、脅かさないでやってくれ」

生き物でもいるのだろうか、そう言うローチェは手探りで壁を伝つて歩き、部屋の奥へ入っていく…スイッチが入り口に無いのも少し疑問だった。

侵入した者に【宝物】を盗られないようにだろうか…それならば余程大切なもののように思える

そんなものを先程会ったばかりの僕に見せると言うのだからローチェの考えていることは全く手に取ることができない。どこか怪しく、僕にとっては不思議そのものだ。

「疑問が巡っているようだネ。今は答えられないガ」

暗闇の中で僕の思いを察したローチェはクスクスと笑った…また、目が笑っていない。

パチッ

やっとスイッチを探り当てたらしく、部屋が明るくなった。

先程の暗さとは違って変わって、部屋の壁は白い塗料が塗られ小さな小窓がありにレースの付いた淡い水色のカーテンが両端で綺麗にくくられ、小さな女の子の部屋を思わせた。

この部屋に住む子供のために付けられたような明るく優しい雰囲気
の部屋

その思いも当たっていたらしく、小さなベッドがありそこには沢山の
人形と一緒に

(?!、ローチェ…この人は)

「…ただいま、アイリス」

そこには、【あの人】そっくりの女の子が静かに横たわっていた。

ローチェはその子を「アイリス」と呼び、愛しむようにその小さく
柔らかな頬にそっとキスを落とす。

しかしその女の子が起きることはなく、それ以前に息をしている様
子もなかった。静かに横たわっているだけ

血色のよさそうな顔は今にも起き上がって微笑を浮かべそうなほどだ
それなのに、なぜ

まるで…

その光景に僕の思考は廻り廻ってショートを起こしていた。

「…彼女、アイリスがワタシの【宝物】だ。今は、動けないけどネ」

(何年も眠っているように見える、…【あの人】と同じ顔だ)

「同じなようで同じではない、此処で眠っているのは君の知ってる人ではないヨ。まあ、本質は同じなんだろうけどネ」

ローチェは意味深な事を言い、愛しげにアイリスの髪を撫でていた。スルスルとブラウンの長い髪の毛がローチェの指によって梳かれていく

まるで父親のようだ

(ローチェの娘なのか…?)

「いや、それは違う。命の恩人みたいなものだネ」

(恩人…?)

「アア。でもそれを話すのは明日にしよう、もう遅い眠らせてくれ」

ローチェは僕を窓の方へ向けた。雨はいつの間にか止んでいたが、外は暗く街灯の光が夜が来たことを告げていた。

重い闇の中にぼうつと灯った暖かな色をした街灯、どこか寂しげなところが誰かの笑顔によく似ている。

一つ、静かに了解を伝えるとローチェは僕を抱え直すと踵を返し力ウンターのあつた店の部分となる部屋へ戻っていった。

アイリスが横たわっているベッドが遠ざかっていく

ふと、女の子が寝ていた方向から声が聞こえたような気がする。

小さな細く、でも優しい声で

「おやすみ、また此処で」

と

店に入って、カウンターの近くの階段を上って右側そこにはローチェの部屋があった。

抱えられそこから見える情報なので確かかはわからないけれど、確かにそこで寝起きしているようだ。その証拠に身に付けている服と同じような服がベッドに引っ掛かっていた。

…少し以外だ

そこは本人の外見に似合わず本当に質素な部屋で、木製の古いベッドに、同じ材質のクローゼットとテーブルそしてシルクハットやコートを掛けるための古びたフックがベッドの側に立っていた。部屋は灯りをつけても薄暗く窓からは月の光が微かに射し込んで窓辺にぼおつと光の花を咲かせていた

そんななかで一際目を引いたのは、テーブルの上に無造作に置かれた大人の握り拳位はあるだろうという大きな鉱石の塊だった。

全体的に赤みを帯びたその鉱石は窓から月の光しか入ってきていない暗い部屋でも自らが薄くキラキラと光っていた。何か特別な力があるような気がして視線が離せなかつたけれど、ローチェが僕をベッドの縁に置いたのでそこからは見えなくなってしまった。

ローチェは構わずバサバサと服を脱いで椅子の縁に引っ掻けると布団に入って直ぐ寝息をたて眠っていた。

疲れていたにしてもこんなに早く寝ることがするのは凄いと思う。僕は人形なので寝るといふことは無いから分からないが

『お父様は今日も会議…でもヴァーナと一緒に寝てくれるから、寂しくないわ』

思い浮かんだのは【あの人】との記憶

僕を抱き締めてすやすやと眠る【あの人】

寝ている間に僕の体は涙を吸ってひどく濡れていた

サビシイ

その感情が【あの人】の心を蝕んでいたんだと今思った

今日、【あの人】は安らかに寝れているのだろうか

不安にかられるがどうしようもない

動くことも話すこともできないのだから

もどかしい

そんな思いが込み上げた

僕はやはり他の人形とは違うのだろうか今まで僕の「意思」が通じたことは無かった

人でも人形でも

しかし、ローチェには伝わっている

僕は確かに「意思」を持っているのだ

やっと自覚できたのにそれでどうなるということはない

少し残念な気持ちにかられてふと、自分に降り注ぐ陽の暖かさに気がついた

いつのまにか夜は明けていて小鳥の囀りが窓に響く

キラキラとした朝日はカーテン越しにローチェにも暖かく射し込んで朝を告げていた

「…………ん。」

モゾモゾと寝返りをうつが一向に起きる気配はない
朝には弱いのだろうか

「（おはよう、ローチェ）」

僕は「意識」の中でそつと彼に告げた
するとふつとローチェの顔が緩んだ気がした

…起きる気配はまだない。

朝、もうすっかり陽も高くなつた頃になつてやっとローチェがむくりと起き上がった

髪の毛は寝癖でボサボサ、目はまだトロンとしている
垂れ目なのでこれが普通といえは普通かもしれない

「シー、オはよう」

「（おはよう、よく寝てたんだな）」

「昨日君と出会うまでに色々あつたからネ…さてト」

ローチェはあつという間に着替えクスつと笑つた

今日はワイシャツに装飾の沢山付いたコート、そして昨日とは違つキラキラとした石の付いたシルクハットを被り右手には柄が不思議な形をした杖という若干奇抜な紳士的な格好をしている

これが妙に似合っているのだから、間違いなく元がいいということ
がわかる

そう考えていると不意に抱き上げられた

「（何処へ行くんだ？）」

「君に関係するところだよ、これから先ネ」

そう言うと昨日は気がつかなかったカウンターの奥の部屋の隣にひっそりとある地下へ向かう階段を口笛を吹きながら降りていった

地下にはレンガが敷かれており、奥にある扉には店の入り口に似た装飾が施されていた

無言のまま金色のノブを捻りおもむろに中へ踏み入れた、その時

「ローチエえええ!!」

大きな声が響き【マリオネット】がひとりでに突進してきた

動く度にカタカタと首や手足が鳴り目はギラギラと輝いている

こんな非常識な光景にローチエは驚きの声もあげずに慣れた様子でサツと横にかわした

するとマリオネットは勢い余って閉まったドアにぶつかりガラガラと音を立てて崩れ落ちてしまった

衝撃で外れた四肢が散らばる

「痛ってええ…ウゲ、もげちまつてるしよオ」

「全ク、君も懲りないネ。アーヴェル」

「懲りる訳ねえだろ、この…イテテ」

一つ溜め息をつくときローチエはアーヴェルと呼んだマリオネットに二三歩近づき半ば飽きれ顔で見下ろした

「君、もうちよっと優しくならないかな。ロゼッタに嫌われるヨ?」

「ロ、ロロ、ロゼッタは関係ないだろ!!!?…あ。」

ロゼッタという名前を聞いて酷く動揺した後、抱えあげられている僕に気が付き、またカタカタと音を鳴らしてアーヴェルは首をかしげた

「誰だコイツ…新しい奴か？」

「ああ、ヴァーナって言ってネ、昨日出会ったんだヨ」

「（淒く簡潔だな…）」

「…！ローチエ、コイツ…」

ポツリと思ったことにハツとしたようにアーヴェルはローチエの目を見た

そこには恐れのような色も窺えた

しかしローチエアーヴェルの言葉に首を振ると、ツンと彼の胸を指で弾いた

「！？、イテッ…」

カンツという木製の音が響いてアーヴェルは弾かれた胸を擦りながら渋々引いた

「…また後で話すヨ。まずは君みたいにしないとネ」

そういうと、ローチエはおもむろに手を僕の腹へ突き入れた

骨張った白い手がすると体の中へ入っていく

何かを探り当てるように上下左右に動き回り、そして掴んだ

突然のことで状況が飲み込めないまま、僕はローチェが僕の中から何かを抜き取ったことにより

【意識】が途絶えた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0597r/>

D o l l * F i g h t

2011年10月8日19時19分発行